様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １９ 日現在

機関番号：２４３０２
研究種目：若手研究
研究期間：2021～2023
課題番号：２１Ｋ１２９５４

研究課題名（和文）北アイルランドにおける詩人のアイデンティティ：ジョン・モンタギューを中心に

研究課題名（英文）Identity of Poets in Northern Ireland: John Montague and Other Related Poets

研究代表者
西谷　茉莉子（Nishitani, Mariko）

京都府立大学・文学部・准教授

研究者番号：９０７５６３５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　700,000円

研究成果の概要（和文）：　複雑な構造を持つ北アイルランド社会における詩人のアイデンティティと文学との関わりを、主にジョン・モンタギューの文学活動や詩作品を通して考察した。具体的には、アイルランド語やアルスター・スコッツ語に対するモンタギューの態度を明示し、紛争において両宗派の緊張が高まる中でプロテスタント出自の詩人ジョン・ヒューイットとともに行ったリーディングツアーの意義を検証した。さらに、1960年代に北アイルランド社会において促進された地域開発や、第二次大戦時にその基礎が敷かれた農業の近代化の文学的なインパクトについて考察した。それによって、作品内外から見出せるモンタギューのアイデンティティのあり方を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
北アイルランドの文学史において、「アルスター・ルネサンス」の詩人に関しては着実に研究が積み重ねられてきた。一方、その前世代の詩人の試みが北アイルランドの文学の創出にどのように寄与したかについては手薄であることが否めない。本研究の学術的意義は、1950年から70年代前半までの北アイルランドに焦点を当てたことにある。
ポスト・ブレグジットで北アイルランドがイギリスに残留する意義がこれまで以上に問われ、北アイルランドにおけるアイデンティティが、文学作品においていかに表現されてきたかという問題に向き合う必要性に迫られている。本研究課題の成果はその答えの一端を示すことにつながる。

研究成果の概要（英文）：　This study examines the relationship between poetic identity and literature in Northern Irish society by focusing on the poetic works and literary activities of John Montague. It examines Montague's attitudes toward the indigenous languages of Irish and Ulster-Scots. It also explores the significance of the reading tours Montague, a Catholic, conducted with the Protestant poet John Hewitt during the Troubles. Additionally, the study considers the literary impact of the rapid development of Northern Irish society in the 1960s and the modernization of the agricultural system, which was initiated during the Second World War. Overall, this study elucidates the nature of Montague's identity in terms of both textual and contextual aspects.

研究分野：人文学

キーワード：北アイルランド　アイルランド　ジョン・モンタギュー　アイデンティティ　北アイルランド紛争　アイルランド語　アルスター・スコッツ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１（共通）

１．研究開始当初の背景

1921 年、アイルランドが南北に分割され、北アイルランド自治政府が発足して以来、北アイルランドは複雑な社会的状況に置かれた。歴史的経緯により、住民の帰属意識はイギリス・アイルランドの間で二分化され、加えてスコットランドからの入植者の子孫であるアルスター・スコッツとしてのアイデンティティも混在していた。そのような複雑な社会基盤の上に北アイルランドが成立したのである。直近の国勢調査（2011 年）によると、「イギリス人」でもなく「アイルランド人」でもなく、「北アイルランド人」としてのアイデンティティを持つ住民が約 20 パーセント存在する。しかし、現在に至るまで、北アイルランドのアイデンティティが一枚岩ではないことは確かである。

この比較的新しく、複雑性を孕む「北」の詩人としてのアイデンティティを探るうえで文学史上重要な時期は、1960 年代および 1970 年代前半である。1960 年代前半、ベルファストのクィーンズ大学に若手詩人たちが集まり、「ベルファスト・グループ」が結成される。中心メンバーには、後にノーベル文学賞受賞者となったシェイマス・ヒーニー（1939-1913）がいた。また、メンバーのひとりジェームズ・シモンズ（1933-2001）は 1968 年、雑誌 *Honest Ulsterman* を創刊し、北アイルランド文学の内外への発信に貢献した。1970 年代前半までには「ベルファスト・グループ」の詩人は離散し、国外に移住した詩人もいた。しかし、これ以降北アイルランド出身の詩人に対する評価は国内外で高まり、現在に至るまで「北」の詩人が広く認知される方向性を作った。批評家ヘザー・クラークは著書 *Ulster Renaissance: Poetry in Belfast 1962-1972* において、この「ベルファスト・グループ」およびディレク・マホン（1941-2020）等トリニティー大学出身の学友関係を中心とした詩人たちの活動の隆盛を総じて「アルスター・ルネサンス」と捉えている。

「アルスター・ルネサンス」以前の北アイルランドの文学的状況に目を向けると、「北アイルランド詩人」の地位が確固としたものではなかったことが窺える。だが、北アイルランドを詩の主題とする試みはされていた。例えば、ベルファスト出身のジョン・ヒューイット(1907-1987)は、19 世紀のアルスターにおける“rhyming weaver poets”に関心を寄せ、アルスター・スコッツ語で書かれた詩を編纂した。また、アメリカで生まれ北アイルランドで育ったジョン・モンタギュー(1929-2016)は、執筆活動を本格化させていった 1950 年代、ティローンにおける幼年時代の記憶を主題とした詩を書いた。

だが、文学史の中で、「ベルファスト・グループ」の若い詩人たちの登場が、彼ら前世代の詩人の存在感を霞ませたことは否めない。1960 年代後半以降、紛争が激化するのに伴い、「ベルファスト・グループ」の詩人たちはメディアの注目にさらされることとなったことがそれに拍車をかけた。それゆえ、アルスター・ルネサンス以前からの、あるいは同時進行していた前世代の詩人の試みを検証することが、北アイルランドの詩的状況に関して見落とされがちな側面に照射することにつながる。

第二次大戦後の 1950 年代から「アルスター・ルネサンス」の区切り目である 1970 年代前半にかけて、モンタギューや他の詩人たちが「北」のアイデンティティをどのように模索していったのかという問いを本研究の出発点とした。

２．研究の目的

本研究の目的は、複雑な社会構造を持つ北アイルランドにゆかりのある詩人たちが自身のアイデンティティをどのように模索したか示すことである。北アイルランドを詩の主題にすることを意識的に試みたジョン・モンタギューを主軸として、1950 年代から 1970 年代前半にかけての北アイルランドにまつわる文学的活動や作品を考察した。

３．研究の方法

次の論点を基に、作品分析や作家の文学的活動について考察を行った。

(1) *The Rough Field* における公/私のアイデンティティ

1960 年から 10 年余りをかけて、アルスターに叙事詩を創造することを意図して書き上げたと評される長編連作詩 *The Rough Field* を分析し、モンタギューの詩人としてのアイデンティティを考察する。本作品では、1607 年の「伯爵の逃亡」やアルスターのゲール文化の衰退など、歴史的主題が掘り下げられる一方、同時代の北アイルランドの近代化、モンタギュー家の系譜などの主題が複雑に交錯する。本研究では作品を丹念に読み解き、作中に表されるアルスターとそこに表出されるモンタギューの公/私のアイデンティティを考察する。

(2) *The Planter and the Gael* に見られる北アイルランドのプロテスタントとカトリックのア

イデンティティ
1970 年、北アイルランドのアーツカウンシルの主催で、モンタギューはジョン・ヒューイットとリーディングツアーを行う。その際に作成されたパンフレット *The Planter and the Gael* (1970)の分析を行う。タイトルから示されるように、詩集はプロテスタント（the Planter）出身のヒューイットとカトリック（the Gael）出身のモンタギューの背景が対置された構成になっている。作品に表出されている彼らの北アイルランド詩人としてのアイデンティティを比較する。また、彼らが行なったコラボレーションの社会的文学的意義を考察する。

(3) 第二次世界大戦およびその余波が「北」のアイデンティティに及ぼした影響
モンタギューの散文や詩作品に見られる第二次大戦とその余波についての言及を分析し、そこに見出せる彼の北アイルランドのアイデンティティを考察する。同時代の文学作品との比較を行ったり、当時の社会的歴史的文脈に照らし合せたりしながら、大戦が北アイルランドにおける詩的アイデンティティの形成に与えた影響を示す。
第二次世界大戦中、北アイルランドがイギリスの傘下で参戦し、アイルランド自由国が中立路線を取ることで、南北アイルランドの分離が加速したことは広く指摘されている。つまり、大戦は、北アイルランド社会の独自のアイデンティティの発展を少なからず促進した出来事であった。「ベルファスト・グループ」の多くの詩人より一世代年上のモンタギューは、幼少期に第二次世界大戦を体験した世代であった。彼はエッセイにおいて大戦について回想し、その余波について言及しているが、このような視座は大戦当時すでに彼の物心がついていたからこそ得られたものである。大戦の影響や戦後の北アイルランドの変化について、モンタギューは「ベルファスト・グループ」の若い詩人たちと異なる捉え方をしていたと考えられる。

４．研究成果
３で述べた論点を中心に研究を進めたが、必要に応じて軌道修正を行った。修正点として、詩人のアイデンティティと北アイルランドにおける言語状況（アイルランド語、アルスター・スコッツ語）の関係についての考察を加えたこと、および北アイルランド紛争というコンテクストを当初よりも重視したことが挙げられる。また、第二次世界大戦の余波については、当初想定していた以上に北アイルランドにおける農産業の近代化に比重を置くこととなった。なお、ニューヨーク州立大学バッファロー校の図書館が所蔵する未刊行資料の閲覧が、テクスト分析の精度を高めることに役立った。

(1)モンタギューのアイランド語に対する態度
The Rough Field と同時期に発表した翻訳詩集 *A Fair House*(1972)の序文、その他アイルランド語についての記述が見られる散文等を吟味し、彼が北アイルランドに見出した自らのアイデンティティと言語事情の関連を明らかにした。さらに、その考察結果に照らしながら、*The Rough Field* に収められたアイルランド語を主題に扱う作品を分析した。英語とアイルランド語の完全な二言語話者ではないモンタギューの文学的可動域は限られてはいるが、アイルランド語がアイルランド詩の遺産であると確信し，それをゲールタハト出身者以外にも受け継ぐことができるという可能性を提示したこと、そして鋭い言語感覚と技巧でもってその遺産を英語の詩の中に受け継ぐ手立てを示したことが、彼の最大の功績であると結論づけた。

(2) 北アイルランドのプロテスタントとカトリックの関係、および詩人のアイデンティティ
The Rough Field を主な分析対象とし、モンタギューが、自身のカトリック・アルスターのアイデンティティを足場にしながら、アルスターにおける入植の歴史がもたらした交雑性や分断という諸相を捉えた様を示した。

①(1)では、モンタギューのアイルランド語に対する態度を考察したが、その補遺として(2)においてはアルスター・スコッツ語に対する態度も分析対象とした。アルスターに入植したプロテスタント系住民の中にはスコットランド出身の人々が多く含まれており、彼らは、アルスター・スコッツ語と呼ばれる独特の英語の方言を発展させた。現在の北アイルランドの言語的風景には、英語、アイルランド語、アルスター・スコッツ語が混在しており、“Even English”という詩はそのような交雑した言語的状況を端的に表している。アルスターにおけるアイルランド語起源の地名を、モンタギューが遺産と捉えていることは疑う余地がない。それに対して、スコッツ語は遺産であるとは認識されていない。だがこの詩では、両言語の混成語をアルスターに自生したものとして彼が受け入れる可能性が示唆されている。

② *The Rough Field* は、1960 年に着想を得て 10 年余りかけて書き上げられた作品である。執筆を開始した当初は紛争を意識していなかったという彼自身の言葉にもある通り、この作品は、1950 年代以来彼が取り組んできた「北」の主題の模索の延長線上に位置付けられる。そのため、デビューと時を同じくして激化していった紛争の緊迫感の元で詩を書かなければならかった「ベルファスト・グループ」の詩人の「北」の模索のあり方とは異なる。だが、北アイルランド紛争へのモンタギューの関与の度合いは、彼自身が述べていることから示される以上に強い。詩集に先行して 1970 年に刊行されたパンフレット版 *A New Siege* には公民権運動の指導者

バーナデッド・デヴリンへの献辞などが記されており、彼が当時の北アイルランド社会の政治的状況にいち早く反応していたことがわかる。

③1970 年、プロテスタント出身の詩人であるジョン・ヒューイットとともにモンタギューが北アイルランドにおいて行ったリーディングツアー「入植者とゲール人」の意義に着目し、より広い視野から北アイルランドにおけるアイデンティティの問題を扱った。「入植者」はヒューイット、「ゲール人」はモンタギューのことを指している。紛争における両宗派間の緊張感の高まりの中、ツアーでは時に観客の間で緊張感が走った場面もあったという。このような文脈においてステレオタイプの役割を引き受けることは「ある種のジェスチャー」であり、「共通の聴衆に声を届かせる」ための試みであったとモンタギューはみなしている。このように、時にステレオタイプにみえるまでに明確にアイデンティを表明し、同時代の北アイルランド社会が抱える問題を扱い、聴衆に直に訴えかけようとする彼の試みが浮かび上がってくる。

④*The Rough Field*のパート３“The Bread God”は、北アイルランドの宗教的見取り図を示した作品群である。モンタギューの語り手は、カトリックの地域社会の内部から、プロテスタントの過激派の憎悪とカトリックの人々の盲目的純朴さを観察する。そして、モンタギュー家のルーツである刑罰法時代の礼拝所を訪れ、苦難の中で祖先が守り伝えた強い信仰心が自身を含めたモンタギュー家の子孫に引き継がれていないことを痛感する。パートの最後の詩“An Ulster Prophecy”は、作者自身の修正が施され、第５版ではテクストの下にユナイテッド・アイリッシュメンのハープの記章が挿入された。このような修正が加えられることによって、「統一されたアイルランド」というアイルランドの理想像の実現に対する可能性が開かれることとなった。

(3) 北アイルランドにおいて行われた地域開発、および第二次世界大戦に基礎が敷かれた農業技術革新の近代化の文学的なインパクト

モンタギューは、すぐれた詩人は同時代を直視しなければならない、アイルランド文学は過去にとらわれすぎる傾向があると述べている。アイルランド詩の「現代化」を意識する中で、モンタギューはティローンが経験していた変化に着目する。第二次世界大戦中、アイルランドの「北」と「南」は大きく異なる体験をした。中立的な立場をとったアイルランド自由国とは対照的に、北アイルランドには軍隊がもたらされ、ティローンにはアメリカ兵が駐屯した。その副産物として近代化が加速する。大戦と近代化のつながりは、散文“Tyrone: The Rough Field” (1963)において顕著に示されている。そのテーマは“A Drink of Milk”(1976)に引き継がれ、農業技術の改革がティローンの伝統的な風景を変えたことが示唆される。また、*The Rough Field*の“A Hymn to the New Omagh Road”では、土地開発の一環である道路建設によって引き起こされる「損得」が「収支表」のフォーマットで考察される。農業の技術革新や土地開発の礎を第二次世界大戦の余波として示すことが、北アイルランド独自の詩のテーマを展開する試みの一環であったと結論づけられる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 西谷茉莉子	４．巻 31・32合併号
２．論文標題 ジョン・モンタギューとアイルランド語をめぐって--The Rough Fieldを中心に	５．発行年 2023年
３．雑誌名 『コルヌコピア』	６．最初と最後の頁 41-61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西谷茉莉子
２．発表標題 北アイルランドにおける詩人のアイデンティティ----ジョン・モンタギューとアイルランド語をめぐって
３．学会等名 京都府立大学英文学会第12回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 西谷茉莉子
２．発表標題 ジョン・モンタギューと北アイルランド紛争―The Rough Fieldの分析を中心に
３．学会等名 第50回関西アイルランド研究会例会
４．発表年 2023年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

今年刊行予定の共著『アイルランド文学の核心』（春風社）に「ジョン・モンタギューの詩に見るアルスター――『荒蕪地』創作の背景をふまえて――」と題する章を寄稿した。現在初校を待つ段階である。

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関